

文体論の理論と実践

— クライストの『ロカルノの女乞食』を例にして —

廣 川 智 貴

1. はじめに

本稿の目的は、ドイツ語文体論の現状を現代文体論の中心的存在である英語文体論と比較したうえでその問題点を指摘し、それを克服するひとつの手段として機能文法をとりあげ、その方法論でハインリヒ・フォン・クライスト(Heinrich von Kleist, 1777-1811)の短編『ロカルノの女乞食』(Das Bettelweib von Locarno, 1810 年、『ベルリント刊新聞』(Berliner Abendblätter)紙上に発表、1811 年出版の *Erzählungen* 第 2 巻、86-92 ページに所載、なお作品からの引用箇所の出典はその短さゆえに省略する)を分析することである。

2. 現代の文体論 — 現状と展望 —

現代文体論の創始者とみなされるレオ・シュピッツァー(Leo Spitzer)は、その自伝にも似たエッセイ『言語学と文学史 — 文体論試論』(Linguistics and Literary History: Essays in Stylistic, 1948)のなかで当時の状況を回顧している。¹陽気で秩序が保たれた、懐疑的で感傷的な当時のウィーンのなかで生活したシュピッツァーは、フランス劇団の芝居を見、従僕の「奥様、お食事の用意がととのいました」(Madame est servie.)という台詞に胸をときめかせる多感な青年であった。そしてロマンス言語学を学ぶ決意をするが、当時の大学の授業は、彼を満足させるものではなかった。

マイアー・リュブケ(Mayer-Lübke)によるフランス言語学の授業では、ラテン語の a がフランス語の e に変化するというような音韻規則が扱われ、フィリップ・アウグスト・ベッカー(Philipp August Becker)による文学の授業では、歴史上のデータを吟味し、作家の自伝研究に力が注がれていたのだった。このような言語学と文学の懸隔を感じたシュピッツァーは、これら両者の橋渡しとなるべく、文体論の建設を決意する。

このシュピッツァーの証言からも明らかのように、そもそも現代の文体論とはあまりにも細分化しすぎた言語学と文学とのあいだの求心力として生まれたものであった。現在のイギリスにおける教育文体

¹ Spitzer (1948)

論の第一人者 H・G・ウイドウソン(H.G. Widdowson)の言葉をかりていえば文体論とは「言語学的観点から文学的談話を研究する学問」²であり、ミック・ショート(Mick Short)による「言語学的記述による(文学)テキスト分析へのアプローチ」³という定義も同様の考えに基づくものである。ここで重要なのは、文体論とはなによりもまず文学作品の言語分析をとおしてはじめて成立するということである。

にもかかわらず、筆者の知るかぎり、ドイツ語圏においては(文学的)テキストの言語分析が意図的に回避されているのではないか、と思うほど具体的な分析例がとぼしい。このドイツ語文体論の異常な状況は、近年文体論の発展がめざましい英語圏のそれと比較することでいっそう明らかになる。たとえば、教育的英語文体論のマニフェストの書といわれるロナルド・カーター(Ronald Carter)編の論文集『言語と文学』(Language and Literature, 1982)に含まれる12の論考は、すでに統語論に重点をおいた(統語論といっても、それへのアプローチは伝統文法から機能文法に至るまでさまざまである)具体的な分析を示している。また、最近のものでは、J・J・ウェーバー(J.J. Weber)編『20世紀の小説』(Twentieth Century Fiction, 1995)が、その副題「テキストからコンテキストへ」が示すように、それまでのいわば作品内在的なものから文体論を解放しようとする新しい分析例を提供してくる。

それに対し、ドイツ語圏で出版された代表的な文体論の著作、論文集の多くが「理論」の文字を表題に掲げていることは注目に値する。たとえそのような看板をあげていないにしても、具体的に分析をおこなっている論考は少数である。⁴(あわてて付け加えれば、分析例がまったくないというのではもちろんない。ここで具体例が少ないというのは、一つの作品を取上げた論考、つまり一種の作品論とでもいえるものが少数だということである)。また、このような状況に関連した興味ぶかい現象がある。すなわち、ドイツ語圏の学者たちがフランスやロシアの研究者の理論、文献に言及することはあっても、イギリス、アメリカの学者のそれに触れることがまれだということである。なにも英語文体論を無批判にありがたがる必要はない。だが、たとえ英語文体論が国際的な英語の需要によって、したがって帝国主義的な気運にのり一種のイデオロギーと関係して進出したものであるにせよ、イギリスが現代文体論の中心であることもまた事実である。⁵にもかかわらず、この文体論をこれほどまで無視してもよいのだろうか。理論的考察はもとより不可欠である。しかし、それには具体的な実践が並行しなければならない。その意味で英語文体論がドイツ語文体論に刺激を与えてもよい。重ねていえば、理論と実践の相互作用こそが文体論を支える理念なのだから。

² Widdowson (1975: 3)

³ Short (1996: 1)

⁴ ここで念頭においている主な著作、論文集を挙げておく。Anderegg (1977), Fix (1990), Sanders (1977), Sandig(Hg.) (1983), Spillner(Hg.) (1984).

⁵ 英語文体論の進出の経緯に関しては、斎藤 (1994)を参照。

このような意味で、ハンス・ヴェルマン(Hans Wellmann)編『テキストの文体分析におけるポエジーの文法、語彙、構造』(Grammatik, Wortschatz und Bauformen der Poesie in der stilistischen Analyse ausgewählter Texte, 1993)は、ドイツ語文体論にとって待望の書といえるであろう。これは1993年2月アウグスブルクでおこなわれたシンポジウムにもとづく論文集である。「今や文学を言語学的手段でのみ(文学的・芸術的なもの)である、とつきとめるのは不可能である」、がしかし言語学の問題設定、カテゴリーが文学研究になんらかのかたちで寄与できるはずだ、という理念にこの会議は支えられている。⁶そしてこの理念を現実のものとするべく、上記の書物には古典から現代に至るまでの作品の言語分析が並んでいる。最近の言語学の成果、とりわけテキスト言語学や談話分析を導入した分析は興味ぶかい。個々の論考すべてが優れたものであるとはいえないが、これまでの状況を考えると、文学作品を中心にした実践例を示してくれたというだけでも十分評価されてよい。

編者の序言から推察できるように、この論文集は実際の教育の現場から成立したものである。ところで、スタンレー・フィッシュ(Stanley Fish)が記述から解釈への論理的飛躍を指摘し、文体論を存亡の危機にまで追いやったことはよく知られているが、そこから息を吹き返すきっかけを与えたのもイギリスでは教育的文体論であった。ドイツ語文体論の明暗もこの教育的文体論をいかに展開していくにかかっているといえよう。本稿も基本的にはこの立場にたつものであり、英語圏の教育的文体論の代表者、とりわけウイドウソン、カーター、ショートらに触発されたところがおおきい。この学派の特徴は、カーターの「実践文体論」という言葉に象徴されるように、何よりもまず具体的な分析が優先される点にある。彼らによって展開された方法をドイツ語のテキストに応用することで、ドイツ語文体論の行き詰まりを打開するきっかけをつかむことができると考える。

3. 機能文法と文体

3. 1. 文体論における機能文法の位置

文体の概念をめぐることはさまざまに論じられてきた。G・N・リーチ(G.N. Leech)とショートは、その共著『フィクションのスタイル』(Style in fiction, 1981)の前半部でこれまでの文体概念の変遷を一元論、二元論、多元論と分類している。⁷

一元論とは、フローベールが「それは肉体と魂のようだ。形式も内容も私にはひとつのものなのだ」といったように、内容と形式を同一とする立場である。たとえば詩の場合、文字通りの意味を提供せず

⁶ Wellmann(Hg.) (1993: 3)

⁷ Leech/Short (1981: 10-41) なお、ドイツ語圏を中心にした文体概念、および 文体論の歴史的変遷についてはSowinski (1999: 17-51)、Sanders, Willy: Stil im Wandel. In: Fix, Ulla/ Lerchner, Gotthard(Hg.): Stil

に、解釈を読者に委ねるメタファーが多用される。これはいうまでもなくパラフレーズを拒むものであり、したがって形式と内容の一致を主張する一元論者にとって格好の論拠となる。また、ローマン・ヤコブソン(Roman Jakobson)がメタファーとメトニミーを独自に区別して以来、この論拠は単に詩のみならず、小説においても効力をもつようになった。実際、このアプローチからの分析はすぐれた成果を挙げている。⁸したがって、一元論の正当性もむろん認められなければならない。だが、この立場はテクストを分化することのできない全体としてとらえるので、その結果として言語選択の調査が制限されるという事実は否定できない。

それに対して、二元論は意味と形式の二分を、換言すればパラフレーズを可能とする立場である。とりわけ言語の深層構造と表層構造の関係を究明しようとする変形文法は、文学作品における意味と形式との関連を考察するうえで重要な役割を果たし、文体論に大きな影響を与えてきた。その反面、二元論では、言語にあらわれる事物の認識の仕方、つまり後で述べる機能文法でいうところの概念的機能にまったくふれることができないという短所がある。

最後に、多元論とは言語の選択の機能面をそれぞれの機能レベルで認める立場である。ここでは、言語の選択が機能の選択のネットワークにおいてどのように相互関連しているかを記述することになるので、その都度の選択に文体意義を認めることができる。ただ、この立場にも欠点はある。つまり機能それ自体の意味、それどころかそもそも機能の数がどれだけあるのか、という点に関して、言語学者のあいだで見解の一致を見ないということである。しかし、機能の定義に慎重でありさえすれば、先に述べたように包括的な記述が可能であるがゆえに、文体分析に最適な文法理論であるということができる。⁹

3. 2. 機能文法における他動性

ここでいう機能文法とは、イギリスの言語学者 M・A・K・ハリディ(M.A.K. Halliday)が中心となって展開しているものである。言語学はしばしば「形式主義」と「機能主義」という二つのアプローチを大別する。前者はチョムスキーの生成文法が示すように、言語を自立的体系として研究することを目標とする。それに対して、後者は機能文法の源であるブラハ言語学派が示すように、言語の語用論的機能を重視するものである。このような性質をもつ機能文法は、文学的テクストの文体分析にもおおいに貢献してきた。とりわけ、以下に詳述する他動性は、その包括的な記述ゆえにしばしば文学のテクストに

und Stilwandel. Frankfurt am Main 1996, S. 345-357 を参照。

⁸ たとえば Lodge (1984)をそのような成果のひとつに数えることができよう。ただし、Lodge 自身はその後一元論から二元論へと自分の立場を変えたということを第2版のあとがきで述べている。

⁹ 日本の英語文体論の第一人者である豊田昌倫もこの文法理論をもっとも注目すべきものとして挙げている。日本文体論学会(編) (1991: 62)

も応用され、登場人物の肉体的、精神的経験に関する個人的解釈の解明に寄与してきた。

ハリデイはこの文法理論においてまず言語の機能を3つに分類する。¹⁰ 認識的意味を扱う概念的機能(ideational function)、話し手と聞き手の関係を記述する対人的機能(interpersonal function)、そして発話内容に脈絡をつけるテキスト的機能(textual function)がそれである。他動性はこれらの機能のうち概念的機能に含まれるものである。M・ベリー(M. Berry)はこの他動性という概念を簡潔に次のように述べている。

英文法において、われわれはさまざまな選択をすることになる。すなわち、いろいろなタイプの過程、関与者、状況のあいだで、さらにはそういった関与者や状況の果たすさまざまな役割のあいだで、またどれだけの関与者や状況をおくかという点で、そして過程、関与者、状況をいかに結合するかという点で、それぞれの選択をおこなうのである。つまりまとめていえば、これらの選択は「他動性」のそれとして知られているものである。¹¹

ベリーの説明で明らかのように、他動性とは発話者が自身の直面した現実をいかに把握しているかを示すものである。より簡潔に言えば、他動性の問題は「誰か何を誰に対してするのか」¹²という疑問文の形で表現することができる。

他動性を構成する要素としては以下のものを挙げることができる。すなわち、主として動詞によって表現される「過程」、人物や対象の役割を意味する「関与者」、典型的には時、場所、様式をあらわす副詞によって表現される「状況的機能」がそれである。

(1) John painted the house.¹³

たとえば、例文(1)で「過程」を示すのは「塗装する」という動詞である。また、関与者の機能に目を向ければ、行為者はジョンであり、目標は家となる。しかし、目標が過程の結果として生じる場合、それは結果物(the object of result)として記述され、目標とは区別される。

(2) He composed a poem.

¹⁰ Halliday の理論に関しては Halliday (1970), Halliday (1994) を参照。

¹¹ Berry (1975: 150)

¹² Burton (1982: 200)

例文(2)の poem は例文(1)の構文のなかの hause と同様に目標とみなされるかもしれない。しかし機能文法では、(2)における poem は compose という過程の結果として生じると考えられ、目標とは別の役割を与えられる。また、関与者は受益、手段の役も果たす。

(3) He's given John a present.

(4) She's knitted the baby a cardigan.

例文(3)において、John は目的物の受益者であり、例文(4)の baby はサービスの受益者である。これらはいずれも論理的間接目的語によって構成されている。さらに行為者が生物の場合と非生物の場合が区別されることになる。以上で述べた他動性の構成要素をまとめると、次のようになる。

(a) 過程

(b) 関与者(行為者、目標、結果、受益者)

次に節の分類に目を向けたい。パートンは機能文法を文学作品に応用した論文のなかで次のような他動性のネットワークを採用している。¹⁴

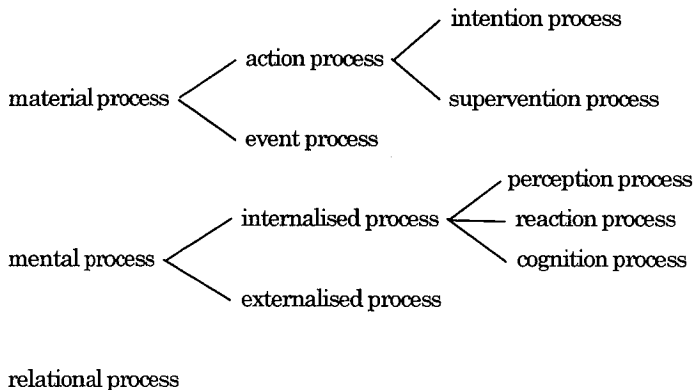


図 1. 他動性のネットワーク

¹³ 以下の例文は、Kennedy (1982)に依る。

¹⁴ Burton (1982: 199)

まず、動詞型は 3 つの主要なタイプに分類されることになる。つまり、行為を表現する **material process**、感覚を表現する **mental process**、関係を示す **relational process** である。ハリデイの主張する分類基準を略述してみると、(1) **mental process** では、「つねに感覚を備えた一つまり、考えたり、感じたり、知覚したりする一人間という関与者が存在する」。¹⁵ (2) **material process** と **mental process** の相違は、関与者の性質の相違にある。前者の関与者は人や物であるが、後者の関与者はそれよりも広くとらえられる。「物」だけでなく「事実」、換言すれば、節によって表現される事象をも関与者とすることができる。¹⁶ (3) **material process** は、ハリデイ自身が **process of doing** ‘ということからも明らか’のように、動詞 **do** による代用が可能なのである。しかし、**mental process** や **relational process** はそのような書き換えが不可能である。

上述のようにこれら 3 つの主要な動詞型に関して、パートンはハリデイの理論に依っているが、その下位区分はベリーの分類に依拠している。¹⁷簡単に説明すると、**material process** は生物によって遂行される **action process** と非生物による **event process** に区分される。**action process** はさらにその行為が故意的かそうでないかを基準にして、**intention process** と **supervention process** に分けられる。**mental process** は感覚や思考をあらわす **internalised process** と発語行為をあらわす **externalised process** とに分類され、前者はさらに知覚をあらわす **perception process**、反応をあらわす **reaction process**、思考をあらわす **cognition process** に分けられる。以上が他動性の概要である。

4. 現実と知覚

4. 1. クライストと知覚

これまでのクライスト研究において現実という場合、それはクライストの個性と彼をとりまく世界とのコンテキストで議論されることが多かった。現実はその自体独立したものとして個性の対極にあるものとみなされ、個性を脅かす、いわば敵対したものと解釈されてきたのである。この解釈にも正当性はむろんある。しかし、クライストは婚約者ヴィルヘルミーネに対して、次のような書簡を送った作家であった。

あらゆる人間の眼が緑色の眼鏡であるとすれば、それを通して見える対象は緑色である、と判断するに違いないだろう — そして、眼が彼らに諸事物をそのあるがまま

¹⁵ Halliday (1994: 114)

¹⁶ Halliday (1994: 115)

¹⁷ 詳しくは Berry (1975) を参照。

に示しているのか、それとも、それらの諸事物そのものではなくて、眼に属する何かをそれらに付け加えているのではないのか、それはまったく決定しかねるだろう。¹⁸

この手紙のなかで、クライストは現実を問題にしているように見える。しかし、ここで彼の関心を惹いているのは現実そのものではなく、むしろ現実の経験とでもいえるものではないだろうか。ヴィルヘルミーネの理解を容易にするために用いられたメタファーが、問題をかえって面倒にしている描写ではあるが。グレンニーの指摘するように、眼鏡と共に引合いに出された緑色が意味するのは、対象そのものと知覚された対象との一致関係の崩壊を示すものであろう。¹⁹しかし、より効果的なメタファーは眼である、とグレンニーはいう。つまり、問題は物事が人間に対してどのように現象するかということではなく、眼が物事にたいして何をなすのかということなのである。換言すれば、「眼とは経験の対象に向かいゆく心のメタファー」²⁰ということになる。現実をいかに経験し、知覚するか、という問題はクライスト個人のみならず、彼の作品の登場人物にも関係するものである。これを視覚に限定して考察したのが、グレンニーであった。この現実をいかに知覚するかという問題はまさに他動性とも密接に関連している。ハリデイは他動性について次のように述べている。

他動性とは話者が外界の、また彼自身の意識のなかで生じるプロセスを経験し、それを記号化したものである。²¹

機能文法では、外界であれ、自己の内面であれ、話者が知覚したものは他動性の選択をとおして明らかにされる。以下ではこの他動性のネットワークがクライストのテキストにおいてどのようにあらわれるかを見てみたい。

4. 2. 『ロカルノの女乞食』

『ロカルノの女乞食』は登場人物たちが幽霊によって翻弄される様子を描いた一種の怪談である。梗概は以下のとおりである。風光明媚の地ロカルノに城を構えていた侯爵が、ある日帰宅していつも銃器を置くことになっている部屋に足を踏み入れると、そこに一人の女乞食が藁の上に横たわっていた。侯爵はこれを不快に思い女乞食に暖炉の後ろに去るように命じたところ、この女乞食はそこまでどろり着きはしたが、杖を滑らせ腰を打ち、喘ぎつつ息絶える。その数年後、財政難に陥った侯爵は

¹⁸ An Wilhelmine von Zenge, 22. März 1801. (訳文中の傍点は原文ではイタリック)

¹⁹ Glenny (1987: 1-5)を参照。

²⁰ Glenny (1987: 3)

自ら所有する城を売ろうとする。そこに買い手としてあらわれたフィレンツェの騎士はくだんの部屋に宿泊するが、幽霊の存在を侯爵に訴え、そそくさと城を後にする。この幽霊の噂が広がり城の売却が困難になったので、侯爵はまず一人で、次の夜には夫人と召使の三人で、そして三日目の夜になると夫婦のみが一匹の犬を連れて、くだんの部屋で幽霊現象を確認しようと試みる。この三日目の夜、犬でさえも後ずさりするのを目にした侯爵はついに発狂し、夫人が城を出るあいだに、自らはその部屋に火を放ち、城と運命を共にする。

ここでは侯爵にしぼって分析を進めてゆきたい。というのも、侯爵が幽霊に翻弄され命を落とす唯一の作中人物であり、したがって、彼のために選択された他動性のネットワークが、この作品における現実の知覚のありようを特徴的に示しているからである。

先に見た他動性の分類に則して、関与者としての侯爵に関連する動詞を識別すると、次のようになる。すなわち、彼を関与者とする動詞は作中において 38 例あり、その内訳は **material process** が 23 例 (**material-action-intention**, 20; **material-event**, 2; **material-action-supervention**, 1)、**mental process** が 13 例 (**mental-externalised**, 8; **mental-internalised-perception**, 2; **mental-internalised-cognition**, 3)、**relational process** が 2 例ということになる。この分類の結果はもしかすると小説の読者にとって意外に思われるかもしれない。というのも、この作品では、物語の出来事そのものではなく、生起する現象に対する登場人物の反応に読者の関心が向くはずだから、ひとり侯爵に限らず **mental process** を示す動詞が作品世界を支配するであろうことを期待させるからである。

動詞型の分類を単に量的にみれば、侯爵は不可解な幽霊の存在を前にし、自らをとりまく環境に対して積極的に働きかけ、およそ発狂などとは無縁な存在であるかのように見える。しかし、問題はどのタイプの動詞がどのような場面で、またどのように用いられているかである。たとえば、クライストは侯爵が女乞食、幽霊と関わりあう決定的な場面では巧みに **mental process** 型の動詞を選択する。そうすることで、侯爵が幽霊に対して直接に行為の作用を及ぼすことができないように描くことができるのである。侯爵が最初にたまたま女乞食のいる部屋に足を踏み入れたときの描写は次のようなものである。

Der Marchese, der, bei der Rückkehr von der Jagd, zufällig in das Zimmer trat, wo er seine Büchse abzusetzen pflegte, *befahl* der Frau unwillig, aus dem Winkel, in welchem sie lag, aufzustehen, und sich hinter den Ofen zu verfügen.²²

²¹ Halliday (1971: 81)

²² ハインリヒ・フォン・クライストの著作からの引用は、Heinrich von Kleist: Sämtliche Werke und Briefe.

この引用では、「命令する *befehlen*」という *mental-externalised process* 型の動詞が選択されている。この場面の後、侯爵は幽霊の存在をフィレンツェの騎士より知らされることになり、その存在を何度も確認しようとつとめる。そして、最後にそれを試みる時、すなわち作品中唯一の直接話法があらわれるクライマックスを思わせる箇所でも、このタイプの動詞が侯爵の世界観を支配している。彼が幽霊に最も直接作用を及ぼすことのできる動詞型、つまり *material-action-intention* 型の動詞で、幽霊を目標にする構文を用いることは最後までない。侯爵が最初に女乞食に命令を下したとき、そこにあらわれた動詞は *mental-externalised process* 型の語彙ではあったが、彼女は素直に彼の言葉に従った。しかし、このクライマックスに至っては、行為者である侯爵の働きかけが報われることはない。

Bei diesem Anblick stürzt die Marquise, mit sträubenden Haaren, aus dem Zimmer; und während der Marquis, der den Degen ergriffen: wer da? *ruft*, und da ihm niemand antwortet, (...)

また、侯爵が幽霊の存在を知覚する決定的な瞬間に用いられる *mental-internal-perception* 型の動詞は、いずれも聴覚に関するものであり、幽霊の不気味な印象を読者に刻み込むのに効果的である。²³

Aber wie erschüttert war er (der Marchese), als er in der Tat, mit dem Schlage der Geisterstunde, das unbegreifliche Geräusch *wahnahm*; (...)

Sie (der Marchese und die Marquise) *hörten* aber, (...) in der Tat, in der nächsten Nacht, dasselbe unbegreifliche, gespensterartige Geräusch; (...)

これまで、女乞食、あるいは、幽霊を前にした侯爵が用いる語彙を見てきた。ここで中心となった *mental process* 型の動詞 — とりわけ *mental-internal-perception* 型の動詞 — は、C・ケネディ (C. Kennedy) によるジョーゼフ・コンラッド (Joseph Conrad) の小説『内通者』(The Secret Agent) の分析が示しているように、きわめて消極的な意味をもつものである。このタイプの動詞が表現するのは、行為者の支配が及ばない、またそこでは従属的な役割しか果たすことのできない過程なので

Hg. von Helmut Sembdner München 1993. に依った。

²³ Davidts (1913: 83) は早くもこの作品のもつ聴覚的效果を強調している。

ある。²⁴侯爵が幽霊に直面したときのこのタイプの動詞の選択が、彼の現実に対する無力さを的確に表現している。

それに対して、侯爵の現実に対する積極性を印象づけるかのように思われる **material process** 型の動詞、とくに **material-action-intention** 型の動詞はどうであろうか。ここでまず注目したいのは、このタイプの動詞が目標をとる場合、それが具体的な事物であることが多いという点である。

nachdem er die Tür verriegelt, (...)

Bei diesem Anblick stürzt die Marquise, mit sträubenden Haaren, aus dem Zimmer; und während der Marquis, der den Degen ergrieff:

これらの例文に見られるような「人主語＋動詞＋目的語」を備えた他動詞構文は、一般に因果関係を示す構文であるといわれる。²⁵この因果の論理はインド・ゲルマン語族の言語を母語とする現代人の思考の中心を形成するものであろう。扉に鍵をかければ、扉はしまるし、剣に手を伸ばせばその剣を手にすることができる。はじめから行為の結果は明らかである。侯爵も実現可能なものを目標の位置にすえるとき、この因果の論理に支配されているといえる。しかし、女乞食が彼の前に姿をあらわしてからというもの、この論理は混乱してしまったようだ。外界に対する積極性を示すかのように思われるこの動詞は、しばしば目標として再帰代名詞をとり、たとえそうでなくても副詞句によって動詞に込められた行為者の意図が覆されることになる。つまり、侯爵の行為は自分自身に向けられるか、意志のないものとなり、周囲の世界に影響を及ぼすことはない。

und da er sich, mit scheuen und ungewissen Blicken, umseh, (...)

dergestalt, daß beide, ohne sich bestimmt zu erklären, vielleicht in der unwillkürlichen Absicht, außer sich selbst noch etwas Drittes, Lebendiges, bei sich zu haben, den Hund mit sich in das Zimmer nahmen.

侯爵の経験する合理と不合理のあいだの葛藤は、すでに他動性の選択によって示されている。こ

²⁴ Kennedy (1982: 87)

²⁵ Halliday はウィリアム・ゴールディングの小説『後継者たち』を扱った論文のなかで、他動詞節「人主語＋動詞＋目的語」に象徴される近代人の因果の世界とそれを理解できずに自動詞構文を多用する未開のネアンダ

の葛藤に耐えながら、彼は最後に今一度因果の論理にすがろうとする。しかし、その侯爵を行為者とする material process 型の動詞をとる構文で目標となりえたのは、皮肉なことに彼を死に追いやる蠟燭であった。

Der Marchese, von Entsetzen überreizt, hatte eine Kerze genommen, und dasselbe, überall mit Holz getäfelt wie es war, an allen vier Ecken, müde seines Lebens, angesteckt.

「誰が誰に何をするのか」という問いが動詞型と関与者の選択に密接に関係していると先に述べた。今、敢えてこの図式を侯爵に当てはめるとすれば、「侯爵は事物に実現可能なことをする」が、「侯爵は幽霊には何もすることができない」ということになり、最終的に侯爵はこれらの命題のあいだで困惑することになったといえよう。この可能と不可能、自己の感覚のおよぶ領域とそうでない領域とのあいだを揺れ動き、ついには因果が混乱し、発狂するに至った侯爵の内面世界は、クライストによる他動性の選択によって巧みに表現されたのであった。

5. おわりに

ドイツ語文体論の理論と実践の乖離を指摘し、それを克服するひとつの手段として英語文体論の、とくに機能文法からのアプローチの助けをかり、クライストのテキストを分析するというのが本稿の目的であった。機能文法の概念的機能の、しかも他動性のみを考察の対象としたという意味で、ここでのテキスト分析は断片的なものとなったといえるかもしれない。しかし、ドイツ語文体論の現状を改善するある種の方向性は示すことができたと考える。

機能文法理論の記述が冗漫であるという批判、英語のために提案された文法理論をドイツ語のテキストに応用するという試みなど無謀だ、という声があるかもしれない。前者に関しては、ドイツ語圏で機能文法が論じられることがあまりないということを考慮してのことである。ドイツ語文体論で言語の機能的側面に目を配ったものは少ない。長らくドイツ語文体論の手引書とされてきたヴォルフガング・フライシャー (Wolfgang Fleischer) とゲオルク・ミヒェル (Georg Michel) による『現代のドイツ語文体論』(Stilistik der deutschen Gegenwartssprache, 1979) を見ても、わずか数ページ、しかも出版年から見て無理からぬことではあるが、プラハ言語学派の理論に触れているだけであり、²⁶その傾向は

ールタール人の世界観を比較し詳細に論じている。詳しくは Halliday (1971) を参照

²⁶ Fleischer/Michel (1979: 23-27) ちなみに、Fleischer と Michel はその後共著者に Günter Starke を加えて、『現代のドイツ語文体論』(1993)を新たに出版したが、そこでは特に機能文法論を論じていない。

近着のベルンハルト・ゾヴィンスキー (Bernhard Sowinski) による入門書においてもそれほど変わらない。²⁷したがって、機能文法の記述はドイツ語文体論にとって意味があったと考える。また、後者の批判は生じてしかるべきものである。英文法とドイツ語文法との比較検討が不可欠であることはいうまでもない。ただ、ハリデイが機能文法の性質に関して、「言語の機能理論は語や構造ではなく、意味についての理論である」²⁸と述べていることに注意したい。彼の言葉が示すように、この理論はそもそも言語の意味的側面に重きを置くものであった。いかなる言語であれ、この意味なしには成立しない。ドイツ語もその例外ではない。したがって、ドイツ語による文学作品を分析する際にも、この文法理論が作品の意味に関してある程度の文体的指標を提示してくれるのではないだろうか。

文体論で援用される文法理論は何も機能文法だけではない。さまざまな文法理論、また、ドイツ語圏でこれまで展開されてきた文体理論をも考慮し、文学テキストのもつ諸相を明らかにしてゆくことが今後の課題である。

²⁷ Sowinski (1999)

²⁸ Halliday (1971: 62)

文献一覽

- Anderegg, Johannes (1977): Literaturwissenschaftliche Stiltheorie. Göttingen.
- Berry, M. (1975): Introduction to Systemic Linguistics, Vol. 1. London.
- Burton, Deirdre D. (1982): Through Glass Darkly: Through Dark Glasses. In: Carter, Ronald(ed.) (1982): Language and Literature. An Introductory Reader in Stylistics. London. S. 194-214.
- Davidts, Hermann (1913): Die novellistische Kunst Heinrichs von Kleist. Nachdr. Hildesheim 1973.
- Fix, Ulla (1990): Beiträge zur Stiltheorie. Leipzig.
- Fleischer, Wolfgang/Michel, Georg (1979): Stilistik der deutschen Gegenwartssprache. 3., durchges. Aufl, Leipzig.
- Fleischer, Wolfgang/Michel, Georg/Starke, Günter (1993): Stilistik der deutschen Gegenwartssprache. 2. Aufl. Frankfurt am Main.
- Glenny, Robert E. (1987): The Manipulation of Reality in Works by Heinrich von Kleist. New York; Bern; Frankfurt am Main; Paris.
- Halliday, M.A.K. (1970): Language structure and language function. In: J. Lyons(ed.): New Horizons in Linguistics. Harmondsworth. S. 145-165.
- Halliday, M.A.K. (1971): Linguistic function and literary style: An inquiry into the language of William Golding's The Inheritors. In: Weber, Jean Jacques(ed.) (1996): The Stylistics Reader. From Roman Jakobson to the present. London. S. 56-86.
- Halliday, M.A.K. (1994): An Introduction to Functional Grammar. London.
- Kennedy, Chris (1982): Systemic Grammar and its Use in Literary Analysis. In: Carter, Ronald(ed.) (1982): Language and Literature. An Introductory Reader in Stylistics. London. S. 82-99.
- Leech, G.N./Short, M.H. (1981): Style in fiction. An linguistic introduction to English fictional prose. London; New York.
- Lodge, David (1984): Language of fiction : essays in criticism and verbal analysis of the English novel. 2nd ed. London.
- Mehigan, Timothy J. (1988): Text as contract. The nature and function of narrative discourse in the Erzählungen of Heinrich von Kleist. Frankfurt am Main; Bern; New York; Paris.
- Sanders, Willy (1977): Linguistische Stilistik. Göttingen.
- Sandig, Barbara(Hg.) (1983): Stilistik. Bd I . Hildesheim; Zürich; New York.
- Short, Mick (1996): Exploring the Language of Poems, Plays and Prose. London; New York.
- Sowinski, Bernhard (1999): Stilistik. 2., überarb. u. akt. Aufl. Stuttgart.

- Spillner, Bernd(Hg.) (1984): Methoden der Stilanalyse. Tübingen.
- Spitzer, Leo (1948): Linguistics and Literary History. In: Linguistics and Literary History: Essays in stylistics. Princeton; New Jersey. S. 1-39.
- Wales, Katie (1997): A Dictionary of Stylistics. London; New York.
- Wellmann, Hans(Hg.) (1993): Grammatik, Wortschatz und Bauformen der Poesie in der stilistischen Analyse ausgewählter Texte. Heidelberg.
- Widdowson, H.G. (1975): Stylistics and the Teaching of Literature. London.
- 斎藤兆史 (1994): 「現代の文体論」 月刊『言語』 第 23 巻、第 2 号、東京、76-83 頁。
- 日本文体論学会(編) (1991): 文体論の世界。東京。

Theorie und Praxis der Stilistik

— Kleists „Das Bettelweib von Locarno“ als Beispiel —

HIROKAWA Tomoki

Leo Spitzer, der Gründer der modernen Stilistik, erinnert sich in seinem berühmten Essay „Linguistics and Literary History: Essays in Stylistic“ seiner Schuljahre. Er beschreibt die damalige wissenschaftliche Situation, die von einer Diskrepanz zwischen der französischen Linguistik und Literaturwissenschaft gekennzeichnet war. Sowohl Linguistik als auch Literaturwissenschaft beziehen sich jedoch eigentlich auf eine und dieselbe Sprache. Daher beschloß Spitzer, eine Brücke zwischen den beiden Wissenschaften herzustellen und die Stilistik als eine Art Zentripetalkraft der beiden zu fundieren. Hierbei muß bedacht werden, daß die Stilistik erst auf den Plan treten kann, wenn ein literarischer Text mit linguistischen Mitteln konkret analysiert worden ist.

Trotzdem fällt bei der Durchsicht der bekannten Sammelbände der deutschen Stilistik ein Mangel an praktischer Analyse eines Textes auf. Diese ungewöhnliche Situation wird augenfällig, wenn man die Lage der deutschen Stilistik mit der der englischen vergleicht, die im Mittelpunkt der gegenwärtigen Stilistik steht. Bemerkenswerterweise nehmen deutsche Forscher kaum von der englischen Stilistik Notiz. Zwar läßt sich mit einigem Recht sagen, daß die englische Stilistik sich entsprechend dem internationalen Bedarf am Englischen, also im Kontext einer ‚kulturimperialistischen Ideologie‘ entwickelt. Es steht jedoch außer Frage, daß diese Stilistik, vor allem die erzieherische, großen Erfolg hat. Deshalb sollte sie einen stärkeren Einfluß auf die deutsche Stilistik ausüben.

In der englischen Stilistik spielt die von M.A.K. Halliday entwickelte

funktionale Grammatik eine große Rolle, vor allem die Transitivität, die in der ideationalen Funktion seiner Grammatik von zentraler Bedeutung ist. Die Transitivität wird in drei Prozesse eingeteilt: ‚material process‘ (ein Ausdruck der Tat), ‚mental process‘ (ein Ausdruck der Empfindung), ‚relational process‘ (ein Ausdruck der Beziehung). Mit Hilfe der Transitivität kann man verstehen, wie eine Person ihre Welt begreift. Diese Fragestellung liegt auch der Interpretation von Kleists Werken zugrunde.

Wenn man im Rahmen der Transitivität „Das Bettelweib von Locarno“, vor allem die Sprache des Marchese analysiert, findet man ‚material process‘ (23), ‚mental process‘ (13) und ‚relational process‘ (2). Die zahlenmäßige Überlegenheit des ‚material process Verbs‘ mag unerwartet erscheinen. Denn in der Erzählung steht die Reaktion der Personen auf das Bettelweib im Mittelpunkt. Deshalb erwartet der Leser eher ‚mental process Verb‘. Doch es ist die Frage, welches Verb Kleist in welcher Situation benutzt. Der Autor wählt in der Szene, wo der Marchese dem Bettelweib gegenübersteht, immer ‚mental process Verb‘. Damit kann Kleist dessen Hilflosigkeit in der Welt und die Unheimlichkeit des Bettelweibes geschickt schildern. Wenn er hingegen ‚material process Verb‘ wählt, welches eine Aktivität eines Täters ausdrückt, dann hat das Verb ein Ding als Objekt. Ein solcher transitiver Satz zeigt nach Halliday die Abhängigkeit von Ursache und Wirkung. Zwar herrscht die allgemeine Logik den Marchese. Aber seit er das Bettelweib kennengelernt hat, gerät diese Logik in Verwirrung. Entsprechend häufen sich in seiner Sprache Reflexivpronomen und Adverbialphrasen, die beide eine Wirkung auf die Welt verneinen. Auch hierin zeigt sich seine Kraftlosigkeit.

Die Wahl des transitiven Netzes hat Kleist ermöglicht, sowohl eine logisch begreifbare als auch eine irrationale Welt und darüber auch den in der Welt Verwirrten treffsicher schildern zu können.